

# school 40-year history



田中美夜さん(第18期修了生)



田中さんのスクール修了制作「乾漆朱塗盛器」。大学時代に蓄の形のものをつくりたので、スクールでは花が開いた形にしましたのこと。

「先生のおかげで、創作する喜びや楽しさを知り、人間性も教わりました」  
大澤さんは、44年に独立したが、その後もスクールには6年間通い続けた。「スクールおかげで、今の自分があります」と語るほど、学んだものは大きかった。  
「先生の話は新鮮でした。これから職人のあり方や、デザイン、表現方法に

田中美夜さん(第18期修了生)

## 受講内容

金工	年限	日時	年間回数
基礎コース[彫金]	2年	毎週水曜午後6時~9時	約30回
研究コース[彫金]	2年	毎週水曜午後6時~9時	約30回
専門コース[鋳造]	1年	第2、4土曜日午後1~5時	約20回

漆工	年限	日時	年間回数
基礎コース[塗り]	2年	毎週水曜午後6時~9時	約30回
研究コース[螺鈿・蒔絵]	2年	毎週水曜午後6時~9時	約30回
専門コース[彫刻塗]	1年	第2、4土曜日午後1~5時	約20回

市丸の内)の2、3階に設置された。ここは、鋳物場があつた金属指導所と違い、会議室のような一室でスクールの実習を行つた。

58年には、「高岡市工芸デザイン指導所」と名称を変え、新設された高岡地域産業センターの4階に開設した。

この頃の養成スクールに通っていた一人には、和田彫金工房の和田敬三さん

がいる。彫金所で仕事を始めて、3、4年の頃、「もつと専門的にやるのなら、スクールへ行けばいい」と親方からアドバイスされたという。

講師は、基礎コースが北光生さん、研究コースが鳥田宗吾さん。道具であるタガネづくりから習い、4年通つた。

「基礎から学びましたね。象嵌を本格的に習つて、とても凝った作品をつくりました。スクールで習つたことは、確

実に仕事に活かせています。学ぶなら徹底的に学ぶことが大事です」  
講師から言われた「きれいな道具をつければ、きれいな仕事ができる」という言葉を今も覚えているという。

和田さんは、高岡市の歴史ある町並み、山町筋の工房で、観光客にも高岡の伝統工芸をアピールしている。

重ねて、20期という節目を迎えて、これまでの修了生は745名(平成18年3月末)。20期は金工・漆工合わせて39名が修了。

金工指導所は、44年に「高岡市デザイン指導所」、48年に「高岡市商工奖励館」と変遷し、現在の商工ビル(高岡市伝統工芸産業技術保持者をはじめ、伝統工芸士、クラフト作家など、多くの人材を輩出してきた養成スクールは、高岡の伝統工芸界に確実な実績を築いてきたといえる。

「伝えたい」という思いと「学びたい」という思いがあたりに満ちている。場所はさまざまに変遷したが、養成スクールは40年前から変わらず、教えるものと学ぶものとの熱い可能性の場である。

「大学の専攻科では、一人の先生に教わっていたので、他の技術を知りたいと思ってこのスクールに通いました」  
やはり、大学とは違う工程があつたり、一緒に習つていた仲間にも教えられた。  
「大学を卒業したら、一人になります。スクールに通わなかつたら、今のように制作を続けられなかつたと思います」

田中美夜さん(第18期修了生)

平成11年、高岡市戸出にオフィスパークが整備され、高岡市デザイン・工芸センターが開設した。ここは、造形・体験工房、表面処理室、鋳造場など、充実した設備を誇る。これに伴い、夜間2年間のコースの他に、土曜日午後の専門コースを開講した。

この専門コース(漆工)に通つたのが、漆のクラフト作家で、「駅地下芸文ギャラリー」(P2参照)店長も勤める田中美夜さんである。

「大学の専攻科では、一人の先生に教わっていたので、他の技術を知りたいと思ってこのスクールに通いました」  
やはり、大学とは違う工程があつたり、一緒に習つていた仲間にも教えられた。  
「大学を卒業したら、一人になります。スクールに通わなかつたら、今のように制作を続けられなかつたと思います」

受講生募集を知つて、早速応募した一人の青年がいた。後の重要無形文化財保持者彫金の大澤光民さんである。

大澤さんは、当時26歳。銅器の铸造所に勤めて10年が経ち、すでに高い技術を身につけていたが、製造するのは問屋からの受注品。そんな大澤さんがスクールを受講したのは、「もっと勉強したい」という一心だったという。

「先生の話は新鮮でした。これから職人のあり方や、デザイン、表現方法に

受講生募集を知つて、早速応募した一人の青年がいた。

講師には、金属指導所長、日展作家の可西泰三さん、後に重要無形文化財保持者(彫金)となつた金森映井智さん(当時富山県立高岡工芸高等学校教員)など高岡の伝統工芸を代表する第一者が名を連ねていた。

受講生募集を知つて、早速応募した一人の青年がいた。後の重要無形文化財保持者彫金の大澤光民さんである。

大澤さんは、当時26歳。銅器の铸造所に勤めて10年が経ち、すでに高い技術を身につけていたが、製造するのは問屋からの受注品。そんな大澤さんがスクールを受講したのは、「もっと勉強したい」という一心だったという。

「先生の話は新鮮でした。これから職人のあり方や、デザイン、表現方法に

受講生募集を知つて、早速応募した一人の青年がいた。

講師には、金属指導所長、日展作家の可西泰三さん、後に重要無形文化財保持者彫金の大澤光民さんである。

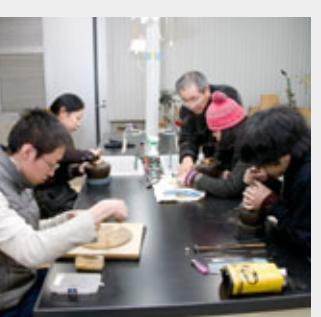
受講生募集を知つて、早速応募した一人の青年がいた。

講師には、金属指導所長、日展作家の可西泰三さん、後に重要無形文化財保持者彫金の大澤光民さんである。

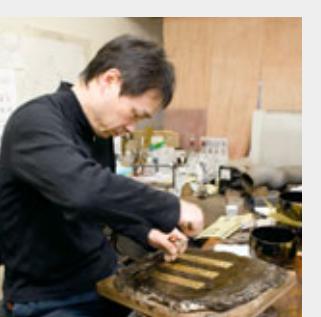
受講生募集を知つて、早速応募した一人の青年がいた。



漆工コースの授業風景(2階の表面処理室)。



金工コースの授業風景(1階の造形・体験工房)。



和田さんの仕事風景。工房は、見学可能。彫金の技を間近で見ることができる。



工房で仕事をする大澤さん。独自に生み出した「鉄ぐるみ法」の作品を制作。



麻生三郎さん(彫金)の指導で、デザインを考える受講生たち。[地場産センター]



特別講義「沈金実技指導」。講師は三谷吾一さん(右)。[商工ビル]



スクール時代の大澤さんと受講生の皆さん。鉄金会というグループをつくり自主的に勉強していた。写真中央で指をさしているのが大澤さん。